

名畑心願述

## 略論安樂浄土義講案

細川行信

本書は東本願寺における昭和四十一年安居の本講『略論安樂浄土義』の講録であり、名畑先生には昭和三十四年の『教行信証化身土卷講案』につづく二度目の本講の講案である。

ところで、前の『化身土卷』の講義において、先生は『教行信証』の真実の教・行・信・証・真仏土の前五卷に対する方便化身土の卷を講じられるに際し、真実をして真実たらしめる如来大悲の善巧方便に留意され、なかなしく時機の反省と仏恩の報謝について、ねんごろに教諭してくださった事は、当時その講筵にはべる縁に恵まれた者の一人として、一人の感激を味わったことである。而して、その折の講義において、先生が第十八・十九・二十の三願に関し、第十八願を「きわめて地味な願」、第十九願を「きわめて派手な願」、第二十願を「きわめて影の薄い願」と申されたことは、いかにも理解し易い表現であり、とくに第二十の果遂の願についての説明は、今も記憶にあたらしく、或はまた、化土の九品浄土・懈慢界・疑城胎宮の三種の意味についても、くわしく教えていただき、その綿密な分類と共に、現実に即した問

題の提起は、自分自身に関するものとして忘れる事ができない。かかる事情のなかで、五百歳中、三宝を見聞する事のできないという辺地・胎生は『略論安樂浄土義』に、その典拠がある事と学んだものの、なお等閑に過していたところ、ここに『略論』が講じられ、厳密に校異された本文を掲げる本書が出版されたことは、私にとって真に有難く、とくに先生が書誌の研究にもとづき、『論註』・『讚偈』との関係、さらに真仮・信疑の問題などにわたって述べられた本書の内容につき、師恩を念じつつ、所説の一端を已下すこしく纏めてみたい。

## 1

まず『略論安樂浄土義』の書誌については、名畑先生が「発講の辞」において述べられる如く、古來その撰者に関して問題があり、ために安居においても殆んど講じられなかった。ところが、明治に入り、燉煌出土の古写本が発見され、ここに考究の結果、今日では曇鸞の真撰を疑う者がなくなったといわれる。かくて、その撰者をめぐる問題、とくに曇鸞の伝記に関し、さらには諸本と流伝について、先生は、本書の一・二・三・四にわたり適切な解説を施された。このうち『略論』の撰者については、江戸時代に、天台の靈空光謙が『即心念仏安心決定談義本』を著わして非曇鸞撰を唱えてより、浄土門内の学者がこれに反駁した推移について、その論点を要約して述べられるが、さらに諸本と末疏についての解説は、きわめて厳格な資料批判にもとづくもので、まことに先生にして始めて為し得られるものと云えよう。すなわち、ここに紹介される資料は、次に示すごとく燉煌出土の古写二本を

はじめ、わが国の古写本をあげる。

- (1) 大英博物館本(卷子) スタイン蒐集の燉煌出土の中にあ  
り、曇鸞の『讚阿弥陀仏偈』の断簡と合せて『略論』  
の全文を載せ、その識語に「景雲二年三月十九日弟子  
張万及写」とある。

- (2) 龍谷大学本(卷子) 大英本と同じく燉煌本で、その形式  
・内容も共に相近似する。書体は大英本よりやや古様  
で、唐初の書写と推定される。

- (3) 来迎院本(卷子) 大原来迎院如来蔵の所蔵で、『讚偈』  
と一具をなす良忍の手沢本。『略論』の箇所は康和二  
年の書写である。

- (4) 室町時代の写本 本泉寺、常楽寺、祐誓寺の三本で、いず  
れも粘葉綴。

なお、このあと江戸時代の版本、明治以後の刊本を出し、さら  
に刊写の末註を列記して略解される。

2

曇鸞大師の著作として『往生論註』と『讚阿弥陀仏偈』は、つ  
とに重要な聖典として依用されるに拘らず、同じ曇鸞の『略論安  
楽浄土義』が親鸞聖人の著述に引用されていない点、これについ  
て先生は「五 真宗と略論」において、①源空・親鸞両聖人の時  
代には『略論』が知られなかった(理綱院・行誡)、②北嶺で羅  
什撰が行われていたので用いられなかった(開華院)、③近來  
『略論』の三輩観が親鸞のそれと合わない為という、以上の三説  
を紹介して、①と②に対しては『西方指南抄』に出ずる五祖伝の

曇鸞伝に「往生論の註、また略論安楽土義等の文造也」(上末)  
や「拾遺古徳伝」の「往生論の註、略論安楽土義等のふみ、これ  
をつくりたまふ」(四)、あるいは元久二年の興福寺奏状の「第六  
暗<sub>ニ</sub>浄土<sub>ニ</sub>失」中に、曇鸞の名において『略論』の文が節録されて  
いる事より反証され、③の問題については「六 題号及び概観」

・「七 三界不摂の浄土」のなかで、その疑義に答えつつ『略論』  
の要綱を述べられる。このうち、特に題号の上より、燉煌本の二  
本の尾題が共に「讚阿弥陀仏并論」とあり、来迎院本に「讚阿弥  
陀仏偈并論」とあること、さらに概観の上よりも『略論』第二問  
答に「若依<sub>レ</sub>経<sub>レ</sub>擲<sub>レ</sub>義、法蔵菩薩四十八願、即是其事、尋<sub>レ</sub>讚<sub>レ</sub>  
知、不<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>重序」とあり、同第三問答に「今依<sub>ニ</sub>傍無量寿経<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>  
讚、且<sub>ニ</sub>擲<sub>ニ</sub>此経、作<sub>ニ</sub>三品<sub>ニ</sub>論<sub>レ</sub>之」とする曇鸞みずからの言葉によ  
って『讚偈』と『略論』とは本来、分離することのできぬ関係が  
あり、『略論』は『讚偈』に從属したものである事と示される。  
そして、更に『略論』の「略」について、良天の『裏書見聞』  
敬首の『随聞記』や雲華院の『講義』の所説を検討して、先生は  
結局「略の字は文と義にわたって解せられるであろうが、簡略に  
安楽浄土の要義を、問答往復して論議するというほどの題意」  
(六六頁)と、まことに穏当な説を出されている。

3

『略論』一部は、九箇の問答より構成され、それは初めの五問  
答と後の一問答に集約され、この六問答の中で、後の第四・五・  
九の三問答は第三問答から展開したものととして、つまるところ初  
めの三問答を基本にするといわれる。かかる観点よりして、雲華

院が『略論』の本文を二科に分ち、第一と第二の二番の問答を以つて所生の浄土を明かし、第三問答以下は能生の品輩を論じたとする伝統をうけて、先生は「浄土の因果を明かし、特にその因につき、勸信誠疑されてある趣旨を閑却してはならない」（七一頁）と述べられる。これについて、此の疑を誡めるという点より、第三の「生<sub>ニ</sub>安樂土<sub>ニ</sub>者、凡有<sub>ニ</sub>幾輩、有<sub>ニ</sub>幾因緣」の問答と、さらに第四の胎生者や第五の疑惑心の問答に心が惹かれるが、とくに本書では「九 三輩往生の因緣」・「一〇 胎生辺地の往生」・「一一 疑惑と五智」に詳しく叙述される。

まず「三輩往生の因緣」のところには、『大經』の三輩と『觀經』の九品との同異を、全く開合の相異と見た鸞師已来の伝統を解説し、さらには元祖における廃立の義から宗祖の隱頭積についても述べられる。次に「胎生辺地の往生」においては、『略論』で胎生と辺地が同じと説かれるが、さらに胎宮と併称される疑城についても、祖積の意をもとめられる。このうち『三経往生文類』に「弥陀経往生という、他力の中の自力なり。尊号を称するゆへに疑城胎宮にむまるといへども、不可称不可説不可思議の他力をうたがふ、そのつみおもくして、牢獄にいましめられて、いのち五百歳なり」とあり、その後胎宮の文が引かれてある事は、これが第二十願成就の文とされるものであって、先生は「しかも化巻の引用に照らせば、この経文は疑惑の心を以つて、諸功德を修し、彼の国に生まれんと願じて、仏の五智を疑う第十九願の行者と、仏の五智を疑惑して信ぜず、なおも罪福を信じて、善本を修習して、その国に生まれんと願する第二十願の行者とが、共に胎生の往生を得ると解釈される」（一一六頁）と説かれる。

かくて、さらに「疑惑と五智」において、まず疑は不了であり、鸞師は「不了仏智」等の五句から推考して、疑を対治する方面から論述がなされたが、いま先生の教示にもとづいて、静かに本文を味読してゆくと、そこに自ずと、凡夫おにける虚妄分別の罪業、深重が内感され、そのなかに説かれる七喻を通して、仏智不思議の所以が領解される。

（東本願寺出版部発行 昭和四十一年七月 A5版 一五四頁）

#### 松見得忍 述

聖徳  
太子 法華義疏要義

坂東 性純

本書は昭和四十一年度の安居において、松見得忍嗣講が次講の講題として選ばれた聖徳太子の『法華義疏』について行なった講述の要録である。安居の講本として本疏が選ばれたのは、昭和二十五年年度の河辺慶縁擬講による同疏の講述以来これが始めてである。

松見師は、本書を単なる『法華經』の註釈とのみは考えず、日本人の思惟・精神を跡づける時、その根源となるべき著作であるという信念に基づき、宗派未分の太子仏教の性格を本疏を通して何うのに、太子が特に力を注がれた所謂四要品（方便品・寿量品・安樂行品・普門品）及びそれに関連する譬喩・信解・地涌等